

でしかも速かにすることが必要である。その反面デクロリン類は濡蒸にも利用出来又乾燥してからも効力も落ちないので利用度が高い。又蒸熱時間、蒸箱の状態、抜染糊のぐあい、蒸気の圧力、湿度等各工場の条件が異なるので抜染

剤のみで良否は決めかねると思われるが大島紬加工に適した方法が必要である。

ここでは同一条件のもとでオートクレーブを利用して脱色効率及びそれによる絹糸の脆化について実験を行なった。

実験I (抜染効力)

抜染温度	100°±2°C			110°±2°C			120°±2°C		
	アルバ イト ZW	アルバ イト Z	ロンガ リット C	アルバ イト ZW	アルバ イト Z	ロンガ リット C	アルバ イト ZW	アルバ イト Z	ロンガ リット C
150g/l (すりこみ後24時間)	○	●	○	○	●	○	△	●	○
100g/l (すりこみ後24時間)	▲	●	▲	△	●	△	△	●	▲
150g/l (すりこみ後 1時間)	○	△	○	○	○	○	○	○	○
150g/l (すりこみ後 1分)	○	△	○	○	△	○	○	○	○

(抜染による糸の強度)

抜色温度	100°±2°C			110°±2°C			120°±2°C		
	アルバ イト ZW	アルバ イト Z	ロンガ リット C	アルバ イト ZW	アルバ イト Z	ロンガ リット C	アルバ イト ZW	アルバ イト Z	ロンガ リット C
150g/l (すりこみ後24時間)	4	3	5	3	2	5	1	1	3
100g/l (すりこみ後24時間)	5	3	5	5	3	5	2	2	5
150g/l (すりこみ後 1時間)	5	3	5	5	2	5	2	1	5
150g/l (すりこみ後 1分)	5	3	4	5	3	5	2	1	3

注1、抜染用糊はAの結果よりALガムを使用した。

注2、抜染効力試験での ○は純白を示す。 △は利用可能の白。 ▲は半分抜けているもの、斑抜け。

●抜染出来ていないもの。

注3、抜染にはシバランブラックEGL6%で染色した絹糸を使用した。

注4、抜染による糸の強度に5、4、3、2、1をもつて示し、5はほとんど脆化していないもの。4は少し脆化しているが、利用可能なもの、3以下は脆化したことを示す。

(結果)

以上の実験より利用される反物の量によりアルバライトzw系のものかロンガリット-C系の選択をし抜染効力及び糸えの脆化のない条件として120g/l~150g/lの間を使用し蒸熱温度は圧力をかけて103°~108°C、時間はロンガリット系の場合は7~10分程度デクロリン系は15~20分位がよいと思われる。又ロンガリット系のものでデクロリン系の併用等も利用価値があると思われる。これらの利用は染料の抜染性等によつて適時考えなければならぬと思う。

(むすび)

大島紬加工技術の基礎試験として糊の性質抜染、脱色等の利用範囲を知ることが出来たので今後は応用面の研究に利用していきたい。

3、2、6、(題目) 温泉の研究 (継続)

黒川達爾雄

(要旨) 前年度に引続き鹿児島大学の関係者と共に調査研究を行ないつつある。指宿、鹿児島市内等の温泉について別冊報告の予定である。